

はじめに

前回の 5 章では、ダビデがイスラエルとユダの王になったこと、それに伴いエブス人の町＝エルサレムを攻略しダビデの町とし、そこに王宮を造ったことが語られていました。エルサレムが全イスラエルの政治的な中心となっていくのです。

それを受けて、本日の 6 章では、ダビデがエルサレムに「神の箱」＝「ケルビムの上に座す万軍の主」の御名によって呼ばれる神の箱を運びあげたという記事です。「神の箱」には十戒がおさめられています。そしてその上蓋は、贖罪の座であって、神はそこから語って下さるのです(出エジプト記 24 章 22 節)。つまり「神の箱」は、神の御臨在を示すものです。それをエルサレムに運び上げるとは、そこが全イスラエルにとって宗教的な中心となるという事を意味しています。

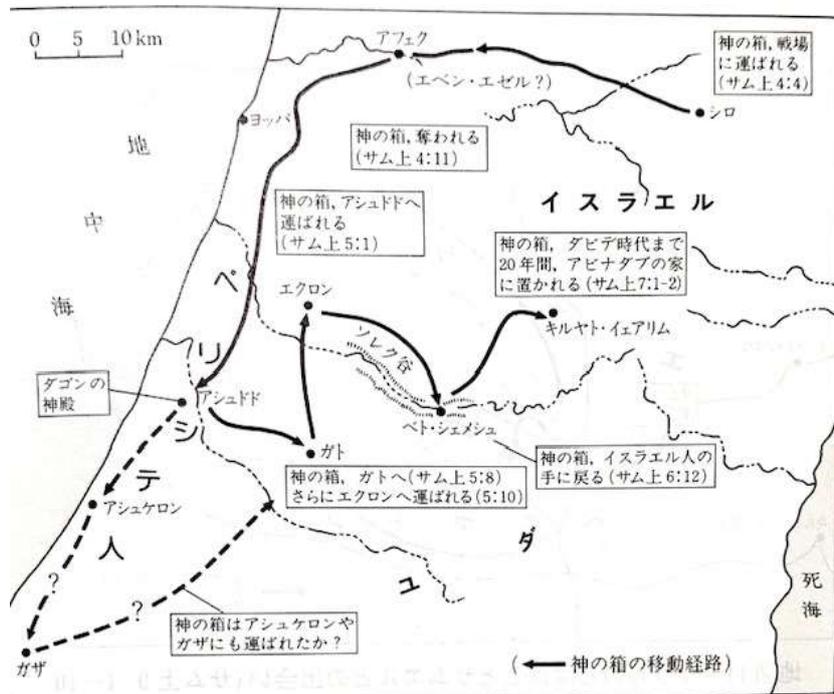
こうして 7 章では、ついに主なる神が、預言者ナタンをとおしてダビデと契約を結び、ダビデ王朝を興すことを約束してく下さるのです。

I サムエル記下 6 章 1～23 節の話の流れ。

本日の個所の話の流れを見てみましょう。6 章 1～2 節では、ダビデがイスラエルの精鋭 3 万と共に、「神の箱」を「バアレ・ユダ」＝キルヤト・エアリムから運び出し、出発したことがいわれています。「神の箱」については、サムエル記上 4～7 章で語られていました。ペリシテ人に奪われた後、「神の箱」はイスラエルの民の助なしにペリシテ人の町を遍歴し、イスラエルの地に戻ってきたことが言われていました。それは以下の町でした。赤字はペリシテ人の植民都市です。

シロの聖所⇒アフェク⇒アシュドト⇒ガト⇒エクロン⇒ベト・シメシュ⇒キルヤト・エアリム(バアレ・ユダ)

「神の箱」の遍歴を示す地図は以下のとおりです。

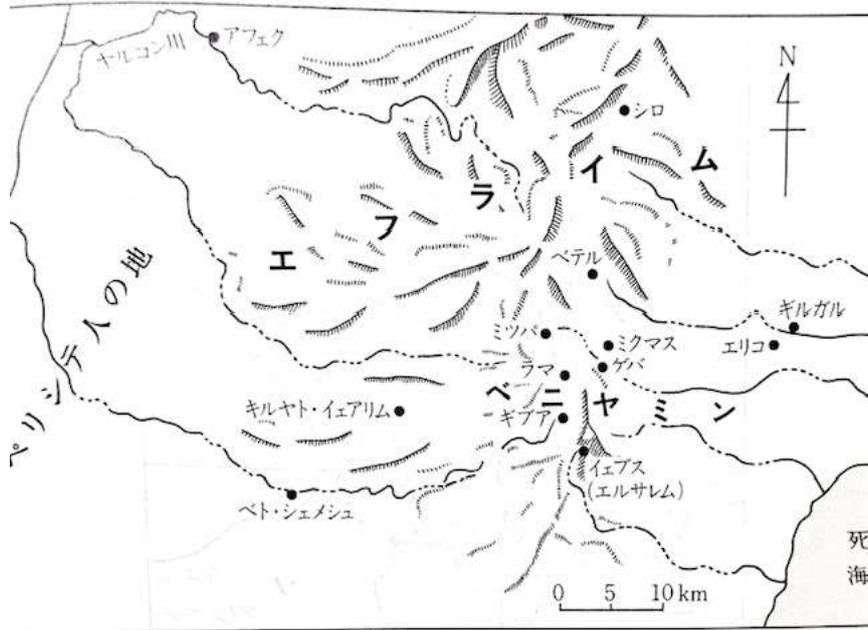


地図 10 ペリシテ人に奪われた神の箱とその遍歴(サム上 4-7 章)

サムエル記上 7 章 2 節では「主の箱がキルヤト・エアリムに安置された日から時が過ぎ、二十年を経た。イスラエルの家はこぞって主を慕い求めていた」といわれています。「神の箱」は 20 年間キルヤト・エアリムに安置されていたわけです。しかしダビデが全イスラエルの王となり、「神

の箱」がエルサレムに安置されるわけです。

そこで 3～5 節にあるように、ダビデたちは、キルヤト・エアリムのアミナダブの家に行き、「神の箱」を「新しい車」に載せて運び出しました。この時、運搬の責任を負ったのはアミナダブの子ウザとアフヨであり、彼らとその新しい車を御したわけです。またダビデとイスラエルの家は、主の御前で「糸杉の楽器、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた」のです。もちろん喜びを示すためです。以下の地図でキルヤト・エアリムからエルサレムへのルートを確認してみましょう。



地図 8 ベニヤミンとエフライムの山地

しかしこの喜ばしい行列は中断してしまうのです。一行がナコンの麦打ち場にさしかかったとき、車を引いていた牛がよろめいたので、「ウザは神の箱の方に手を伸ばし、箱を押さえた」というのです。すると主なる神はウザに対して怒り、その場で彼を打たれたので、彼はその場で死んでしまいます。この事件のため『ダビデは「どうして主の箱をわたしのもとに迎えることができようか』』といて、神の箱搬入を中断しました。つまり「神の箱」をエルサレムにもってこることが、主の御心になかったことなのかどうか、謎となった、ということです。そこで神の箱を「ガド人オベド・エドム」の家に安置させます。その期間は三ヶ月でしたが、オベド・エドムにとっては大役です。この間、主はオベド・エドムの家を祝福しました。

そこで 12 節にあるように、ダビデは、そのことを知ると、王は直ちに出かけ、喜び祝って神の箱をオベド・エドムの家からダビデの町に運び上げたのです。今度は、「神の箱」を牛に牽かせた車に乗せるのではなく、担いで運び上げたのです。これは、出エジプト記 25 章 13～14 にあるように、「神の箱」の本来の運搬方法でした。興味深いのは、ダビデが「主の箱を担ぐ者が六歩進んだとき、ダビデは肥えた雄牛をいけにえとしてささげた」ことです、また「主の御前でダビデは力のかぎり踊った」というのです。こうして全イスラエルの歓呼と角笛の響く中、神の箱はエルサレムに運び上げられました。

この時、16 節にあるように、「サウルの娘ミカルは、主の御前で跳ね踊るダビデ王を見て、心の内にさげすんだ」わけです。理由は、当時、踊り舞うことは奴隷の仕事だったからです。

17～19 節では、神の箱が「ダビデの張った天幕の中に安置」されると、ダビデは主のみ前に焼き尽くすささげものと和解のささげものを献げました。その後、ダビデは万軍の主の御名によって民を祝福し、兵士全員と群衆に輪形のパン、なつめやしの菓子、干しぶどうの菓子を分け与えました。こうしてエルサレムは「神の箱」が安置された聖所となり、全イスラエルの宗教的な中心と

なるわけです。

20～23 節は、こうした感謝すべき喜ばしい出来事とは対照的に、ミカルがダビデに対して皮肉を語ったことがいわれています。彼女はかつてサウル家の王女でしたから、ダビデが踊ったのを見て、「空っぽの男がはずかしげもなく裸になるように」、家臣のはしための前で裸になって踊ったとって皮肉っています。しかしダビデは、次のように返答します。

主なる神は、お前の父やその家のだれでもなく、このわたしを選んで、主の民イスラエルの指導者として立ててくださった。その主の御前でわたしは踊った。

そしてさらに次のように預言めいたことをいうのです。「わたしはもっと卑しめられ、自分の目にも低い者となろう。しかし、お前のいうはしためたちからは、敬われるだろう。」

こうして聖書は、ミカルが子を持つことなく、死の日を迎えた、とって結んでいます。

以上を箇条書きにすると次のようになります。

1. 6 章 1～11 節 ダビデ、神の箱を運び出すが、それを中断する。
2. 6 章 12～19 節 ダビデ、再び神の箱を運び出し、エルサレムに安置する。
3. 6 章 20～23 節 「サウルの子ミカル」の皮肉とダビデの預言。

II. サムエル記下 6 章 1～23 節の解説

【1～11 節】

ダビデは、「神の箱」を運び出すにあたり、「イスラエルの精鋭 3 万をことごとく集めた」とあります。これは、もちろん特にペリシテ人の攻撃を念頭にした警戒ですが、それだけではありません。主なる神は、「ケルビムの上に座す万軍の主」です。その方を示すのが「神の箱」です。したがってイスラエルの兵は、ちょうど偉大な将軍に敬意を払って出迎えるように、ダビデと 3 万の兵は、「万軍の主」の御前に集ったわけです。

そこでキリヤト・エアリムのアビナダブは、二十年間「神の箱」を守ってきましたが、遂にその任から解かれ、「神の箱」を息子のウザとアフヨに運び出させるのです。この時、彼は、牛にひかせる新しい車に神の箱を載せました。牛に牽かせた車を使うのは、20 年前、「神の箱」が、人の助けなしに、牛にひかせる車に載ってイスラエルの地のベト・シメシュに戻ってきたからでしょう。アビナダブは、それを踏まえ、新しい車を用意させたわけです。アブナダブの家は丘の上にありましたから、降り坂になります。そこで車の前をアフヨが車の後をウザが注意深く進んだわけです。ダビデと全イスラエルは主の御前で楽器を鳴らして感謝と喜びを示したわけです。

さてすでに触れたように、アクシデントが起こり、神の箱を運び上げる行列は中断となりました。それは、牛に牽かせた車がよろめいたとき、ウザが神の箱の方に手を伸ばして、箱を押さえたので、主なる神が怒ってウザを打たれ、ウザは神の箱の側で死んでしまったということです。

これは、どう考えたたらよいのでしょうか。ウザの行いは、彼が死なねばならないほど酷いことだったのでしょうか。普通に考えて、牛がよろめいたなら、それに伴って車に載った「神の箱」がすべり落ちないとも限りません。だからウザは、「神の箱」を押さえたわけです。誰が考えても、ウザの行動は非難されるべきものではないでしょう。

では、それなのに、何故主なる神は激怒されたのか。

それは、ウザの行動は、明らかに「神の箱」を一般の荷物と同じ扱いをした、ということにあります。ウザは「神の箱」がすべり落ちないように支えたのではなく、手を伸ばして押さえたのです。そこに主なる神に対するウザの姿勢が露見してしまいました。彼は、あたかも私物を守るのと同じ態度で「神の箱」を守ったのですが、そこには、「神の箱」がかつて遍歴によって示したように、人の助けなしに自ら主権をもって動くことができるということが、すっかり抜け落ちています。しかし「神の箱」は、神の御臨在を示すものなのです。

その点、実は、ダビデも同じです。ダビデはエルサレムを政治的中心とするだけでなく、宗教的中心とするという構想に基づいて「神の箱」を運び上げようとしてしました。しかしそれは、異教の世界で神々を勧請して聖所に運び入れ、その国なり都市なりの秩序安寧を願うのと限りなく似てくるのです。だから「神の箱」において臨在する主なる神が、エルサレムに来ることが本当に御

心に他ならないといことを確認する必要があったのです。しかしダビデは、そのことを主なる神に尋ねてはいないのです。すでに 2 節で「神の箱」が「ケルビムの上に座す万軍の主」の御名によって呼ばれると丁寧に言われていたにもかかわらず、主なる神に御心を尋ねなかったのです。

もともと主なる神はダビデを全イスラエルの王としました。その同じ神が、御心のままにエルサレムにお出でになるのです。だからダビデたちの「神の箱」運搬作業は、人間の敬虔な宗教的な願望によるのではなく、あくまでも、そのような神への奉仕でなければならぬのです。しかしダビデは、エルサレムを宗教的な中心にするのであるという敬虔な自分の考えを、優先して実現しようとしてしまったのです。

その意味でウザの事件は大事です。ダビデの敬虔な考えにストップをかけたからです。それによって、『**ダビデは主を恐れ、「どうして主の箱をわたしのもとに迎えることができようか」と言って、自分のもとに主の箱を移すことを望まなかった**』からです。ここにおいてダビデは、もはや自分の宗教的願望ではなく、主の御心を尋ね求める立ち位置に立ったのです。そのため実際、三ヶ月間、待ち望んだわけです。敬虔さは、神との交わりのうちにあるとき、確かに有益です。しかし敬虔さという宗教感情が独り歩きし、神の御言葉に聞かなくなるとき、それは自己陶醉となり、たちまち反神的なものになるのです。

【12～19 節】

だからこそ、ダビデ王にとって、主なる神が、オベド・エドムの家を祝福しておられるという知らせは、まさに福音でしょう。ダビデの一連の企て、すなわち神の箱をエルサレムに運び上げ、安置するというのは、ダビデの思いを越えて、主の御心であることを知ったのです。だからこそ「**王は直ちにでかけ**」るのであり、「**喜び祝ってダビデの町に運び上げた**」のです。

その際、エルサレムは標高 800m の小山ですから坂道を上る必要もあって、最早、牛に牽かせた車ではなく、民数記 4 章 15 節にあるようにレビ人のケハト族が「神の箱」を運び上げたのです。この時、ダビデはその行列が六歩進んだとき、あらかじめ用意してあった肥えた雄牛をささげて、心からの感謝をしました。また、ダビデは主の御前で、麻のエフォドを着て、力の限り踊ったのです。このような全イスラエルの喜びの声と角笛が響き渡る中、「神の箱」はエルサレムに運び上げられたのです。

この時、聖書はダビデの妻ミカルの態度を語ります。その際、ミカルをわざわざ「**サウルの娘**」とっています。つまり彼女は王女としてのプライドをもって、ダビデを王宮の窓から見下ろしたのです。彼女は、踊りなどいうものは奴隷の仕事であると思っていましたので、今、何が起きているのかを理解できず、ただダビデを軽蔑しただけなのです。

それと対照的に全イスラエルは、「神の箱」がダビデの張った天幕に安置され、ダビデが焼き尽くすささげものと和解のささげものを献げるのを見ました。そしてダビデ王が、万軍の主の御名によって祝福すると、それを感謝しつつ受け止めました。こうして記念の菓子を手にし、「**民は皆、自分の家に帰って行った**」のです。明らかにイスラエルの民は、神によって建てられた王国という新しい時代の幕開けを目にし、味わいもしたわけです。

【20～23 節】

さてミカルは、王女としてプライドをそのままに、ダビデに痛烈な皮肉をいっています。あなたは王であるのに、奴隷のように踊った、といて非難しています。

それに対してダビデは三重に応えています。第一に主なる神は、王権をサウル家からダビデ家に移し、ダビデを全イスラエルの指導者として立ててくださった、とっています。こうしてミカルの王女としてのプライドを挫いてしまいます。

第二に、わたしは、そのような主の御前で踊ったといて、ダビデはまさに主の奴隷であって、主の仕え人だからである、とっています。

そして第三に、これからも世俗の王のように民の上に君臨するのではなく、主の御前に身を低くして仕える。しかしはしためたちからは、敬われるだろう。そのようにダビデはいっています。

ダビデのように主の御前に身を低くして仕えることは、わたしたちの身做うべき態度ですが、しかしその前に、御子イエス・キリストが完全に主の僕となっておられることが重要です。その意味で、ダビデの言葉は、主イエス・キリストを予告する預言となっています。